

ので、萬を以て數ふる此等の遺書の中には、まだ學者に知られないで、然も最も重要な性質の記事も存するかも知れないと恐るゝからである。こゝにいふ奥書といふのは、前記の Ch. XIX, 001^a 第十五枚裏に記された三行の蒙古語であつて、實に前清光緒三十年 (1904) に記されたものである。即ち

bad(a)raguldu^{⑧a} taičing ulus-un bad(a)raguldu turu-iyn
大清 國ノ 光 緒 緒

gučidugar un-a arban sarain sine-iyn nigen-ü edür
第三十 年 十 月 朔 日

degedu bogda lama-iyn ulimar(?) b(a)tdatgu(?) -iyn
上 聖 喇 嘛 ノ ? ?

此の蒙古文は完結したものでは無く、尙書き加へらるべきであつたのを、中斷したものと思はれるが、兎も角之が清の光緒三十年に書かれたものであることは疑ない。従來回鶻文の書物で最も新しい時代のものは、露西亞のマロフ (Malov) 氏が甘肅省の肅州附近で發見した金光明經の寫本であつて、實に康熙二十六年の日附を有して居るのであるが、この實義疏が光緒三十年敦煌地方で書寫されたものとは、言ふまでもなく認めらるべき事實ではない。それで此の奥書については、所詮此の年に蒙古人、もしくは蒙古語を用ゐる人が、この實義疏を見て、その奥にこの文を書きつけたものと見るより外ないのであるが、光緒三十年といへば、敦煌の書窟の發見せられてから四年の後、スタイン氏がこゝを訪ふ前三年のことであるから、發見の事の傳へられて後、此の洞窟を訪うた蒙古の喇嘛教徒が、そこで此の書を手にとつて、或る上聖喇嘛の爲に祈願して之を書きつけたか、それとも前記の如く、ま